

第一章 同性愛者は本当に変わることができるのか？

マイク・リードは、子供の頃から他の少年たちとは違[・]うと感じていました。「やい、いくじなし！」学校の校庭でマイクはよくこうはやし立てられました。「お前、女みたいにボールを投げるんだな！」いじめは時に言葉だけではすみませんでした。ある時、同級生の男の子たちは、靴の中に、針先が中から外に突き出すように針をしのばせ、遊び場のすみにマイクを追い詰めて、その靴でマイクを血が出るほどに蹴ったのです。それで降ちよつとでも「強そうな」少年が近づいてくると、マイクはガタガタ震えるようになってしまいました。

高校に入ったマイクは、学校劇で役をもらい、劇場に出入りする若者たちと付き合うようになりました。そこでマイクは、そういった若者たちの多くが自分と同じように仲間外れにされた経験を持っていることを知り、それからというもの、マイクたちは互いに助け合う同盟を結びました。けれどもマイクはその中の一番近い友だちにでさえ、自分のうちで、他の男性に性的に惹かれる気持ち^ひがどんどんふくらんできていることを知らせませんでした。

大学在学中、初めて同性愛の関係を持ったマイクは、その時やつと本当の自分を見出したような気持ちになりました。その最初の体験以降、マイクはゲイバーに頻繁に出入りし始め、他の男性たちと数々の性的な関係を持つようになりました。

それからマイクはある男性と「恋に落ち」、長期的な関係へと入っていきました。「これこそ僕がずっと探し求めていたものだ」と、マイクは思いました。男性からの愛と注目という必要性が、ついに満たされたかのように思えたのです。

けれどもその「長期的な」関係はたった一年もつただけで、崩壊していききました。マイクは霊的な探求を始めるようになり、神秘主義、ヨガ、クリスチャン・サイエンスなどを試したあと、やっとキリストにとたどり着きました。

「職場の友人二人に誘われて教会に行き、そこで、イエスが僕の罪のために死なれたことを聞きました」とマイクは当時を振り返っています。「そのあとはゲイバーから足が遠のいていったのです。」

それからマイクは教会で、ある魅力的な男性に出会いました。それは以前バーで見かけたことのある顔でした。礼拝の後で話し始めた二人は、その場で絆を感じました。「僕たちは二人ともゲイで、それに二人とも神に対する共通の信仰を持っている」とマイクは思いました。それは関係を築き上げる基盤として完全なものと思えました。まもなく二人は性的に関係を持つようになってしまいました。

二週間後、二人ともが、何かが間違っているという良心の呵責を覚えました。ある晩ベッドで、マイクの恋人はマイクのほうを向いてこう言いました。「僕たち、これ以上こんなことはできないよ。これは間違っているよ。」彼は聖書を開いて、マイクに同性愛の関係を禁じている箇所を見せました。

「その聖書箇所は僕にとって脳天を打ち割るようなショックでした」とマイクは認めています。「僕たちはひざまずき、同性愛から立ち返れるように助けてくださいと主に願ったのです。」

マイクは別の家へと引っ越し、同性愛の過去がまったくないクリスチャンの男性たち二人と同居するようになりました。それからマイクの霊的な探求の旅が熱心に始められました。ゲイバーからほんの二つしか通りをへだてていないようなレストランで働いていた時でさえ、そして昔のゲイ仲間がやってきてはマイクをひやかすような時でさえ、マイクはクリスチャンの立場を堅く守りました。マイクはそのようなゲイたちの目の中に、以前自分が心を感じていた虚しさ^{むじな}と満たされない気持ち^{きもち}が読みとれるようになっていったのです。

やがてマイクはカリフォルニア州サンラファエルにある「ラブ・イン・アクション」^{「訳者注：行動する愛という意味」}というクリスチャンの組織のことを耳にしました。それは同性愛を克服する助けを提供することを専門とした組織でした。一九七九年六月、マイクはその泊まりがけプログラムに参加しました。それから数ヶ月間をかけて、マイクは、男性としての自分のアイデンティティー（自己認識）や、自分以外の男性たちに対する劣等感、日常の思考パターンの鍛錬や、教会内の「ストレート（¹）」な男性たちと健全な友情関係を築いていく必要性といった、自分の人生の深い問題について扱い始めました。

それから数年間をじっくりかけて、マイクは深くて大きな、ゆるがない変化を経験していききました。特に、周囲の男性たちと築いていった友情関係は、マイクの人生を大きく変えていきました。神はそのような友人たちを用いて、マイクに、いやしと、自分は受け入れられているのだという気持ちを与えていくくださったのです。時々、まだ同性愛の誘惑が残っていると

感じて落胆するような時もありましたが、それでもマイクはねばり強く、変えられていくことを切に求めています。

「僕がふんばるにつれて、神は僕を脱出の道へと連れ出してくださるようになりました」とマイクは語っています。マイクは、聖書の中で、神がどれほど自分を愛してくださっているかを、そして自分の人生にも目的を持つてくださっているということを、何度も何度も繰り返し読みました。「僕の心は一新されつつありました。でもそれは時間のかかることだったのです。僕は忍耐を持たねばなりませんでした。」

自信を身につけていくにつれ、マイクは徐々に、教会の賛美礼拝グループの中でリーダーの役割を担うようになり、最終的には二百人の成人が集まるその教会で、定期的に礼拝をリードするようになりました。時おり過去の同性愛の記憶を思い出すことがありましたが、それでも新しい挑戦と友情関係に自分自身を向かわせていくようにとしました。マイクは、神が自分の人生のために立ててくださったご計画がすべて実現することを望んだのです。

その後マイクは、教会で出会った女性たちとデートするようになりました。そのような関係のうち一つが真剣な交際にと発展し、一九八七年、マイクは結婚しました。今日、マイクとその妻ヘレンは三人の子どもに恵まれています。

現在マイクは、以前の同性愛者としての人生は、過去のはるか遠いところのもののような気がすると言っています。「僕は今、自分を一人前の男性、たくましく安定した一人の男性として

考えています。自分が同性愛者であるとは思っていませんし、また『元同性愛者』であるとも、それほど思っていないません。同性愛は、今の僕にはほとんどん関わりが薄くなってきた分野だと思えるのです。」

変化は可能

マイク・リードは、私たちが個人的に知っている、同性愛を克服した何百人もの男性たちのうちのほんの一人にすぎません。私たちはまた、同じような経験をしてレズビ안의過去を克服した大勢の女性たちも知っています。

スターラ・アレンはその一例です。「私の子供時代は多くの点でノーマルなものでした」と彼女は振り返っています。「両親は厳しかったけれど、互いに愛し合っていることを私も子どもなりに知っていましたし、私たちの家庭は安心できる場であったと言えます。ただ、今振り返ってみれば、私が後にレズビアンとの関係を求めることになる素地となった、いくつかの出来事がありました。」

スターラが四才の時、家族で祖父母のもとを訪れたことがありました。「いろんな世間話の途中で、祖父が私をからかい始め、私は傷ついて、泣きだしてしまいました。父はどう対応してよいか分からず、私をベッドルームまで連れて行くと、『ちゃんとおりこうにできる』まで、そこから出ないようと言ったのです。私はまるで自分が罰を受けているような気がして、恥ず

かしい気分になり、そして『もうお父さんになんか、二度とあんなふうには私の感情を表わさないんだから』と堅く決心しました。」

「妹と私が大きくなるにつれ、両親は、男性、特に知らない人は危険であると、私たちに警告を与えるようになりました」とスターラは思い返しています。「父はかつて私にこう言ったことがありました。『もし誰かが俺の娘を傷つけたりなんかしたら、ぶっ殺してやる。』」

スターラが十三才のある晩、知り合いの夫婦の子どものベビーシッターをしていました。それが終わって、子どもの父親に車で家まで送ってもらう途中、スターラの頭に不安な思いがよぎりました。「なぜ私の家に向かう途中で、お酒屋さんになんて寄るのだろう。それになぜこんな泥道に入って行くのだろう。」その男性は車を湖のちようど真横に駐車して、スターラ側のドアが湖の岸すれすれになるようにしました。「どうしてこんなことをするの？」スターラが叫ぶ中、その男性は彼女を座席に押し倒しました。パニックに襲われたスターラは、もう逃げ道がなく、これ以上暴れば、さらに暴力が増すだけであることを悟りました。そうしてその男性はスターラを強姦したのです。

「彼が自分の欲望を満たす代償として、私は踏みにじられ、私自身の感情など完全に無視されたのだという、言いようもない悔しい気分は今でも覚えています。私は自分が彼にそのようなことをさせるような素振りを見せたのだろうかと考えましたが、そうは思えませんでした。それでも私は深い恥を負ったのです。」

強姦の後でスターラは男性に対する父親の警告を思い出しました。「父に本当のことを言えば、父はこの男性を殺してしまうかもしれない、と私は真剣に恐れました。もし父が人を殺してしまつたら、刑務所に送られるかもしれない。私は誰にも言わないことに決心しました。ただすべての思い出を自分の内に閉じこめて、全部忘れてしまおうと。」

スターラの両親は、外見上、娘が以前より少し荒っぽく「もつとふざけた調子」になつたことに気づきました。だぶだぶのシャツにジーンズ姿で、化粧は一切せず、髪の毛もショートで通しました。けれども彼女の両親はそういつたことをすべて、普通のティーンエイジャーに見られる振る舞いとして片づけたのでした。

高校時代を通してスターラはデートを試みました。けれども、男性に対する奥深い恐れと憎しみがすでに彼女の心に根ざしていたのです。「私は無意識に、男性を征服すべき敵としてみなしていました。そのような態度を持っていた私のデートは、どれもさんざんでした。それによつて私は、自分には男性など必要ないだけでなく、男性側も私など必要ないのだ、ということを確認するにいたつたのです。」

大学に入ったスターラは、自分と同類と思えるようなキャシーという女性に出会いました。「私は彼女にフェンシングを教えてあげ、お返しに彼女からハンドボールを教わりました。けれども私の胸を本当に打ったのは、あるハンドボールの試合の後、キャシーがソーダをおごつてあげると言ってくれたことでした。私は彼女の金銭状態がとても苦しいことを知っていましたが、

それでも彼女は私の分をおごると言ってくれたのです。ささいなことですが、それによって私は、彼女の前でなら身構えなくてもいいんじゃないかと思えたのです。私が彼女に対して心を開くにつれ、私たちは深い感情的なつながりを築いていくようになりました。私は彼女に強姦された話まで打ち明けたのです。次第に、私たちは互いに肉体的に惹かれるようになり、やがて恋人同士となっていきました。」

「私たちは五年ほど一緒にいました。最初の数年間は、恋愛の雰囲気がいっぱいでしたが、やがて私は、この関係のために自分自身を犠牲にしていること、彼女よりもっと大きな犠牲を払っていることに気づきました。彼女がその芸術的な才能をもっと伸ばすことに専念できるようにと、家の掃除や買い物や料理は私がしていたのです。やがて彼女はある男性とデートするようになりました。私がそれに反対を唱えると、彼女は、『私がデートすることにあなたが慣れるか、そうでなきゃ私たちの関係を終わりにするかのどちらかよ』とぴしゃりと言い放ったのです。」

スターラはキャシーの恋人としてとどまりましたが、それでも二人の関係の崩壊は止まりませんでした。やけになったスターラは、自分も知り合いの若い男性とデートしてみました。彼女の感情の痛みは増し続け、ついには自殺こそが妥当な解決策だと思えるまでになっていました。

「私は自殺の方法まで選んでいました。虚しさの中で、私は粉々に砕けた自分の人生を見つめ

ていました。私の人生って、こんなものでしかないのだろうか、と。そんな時高校時代にガールズ・クラブを率いていたネルソン夫人の言葉を思い出しました。彼女はいつもこう言っていたのです。『イエス様は本当にあなたの人生を変えてくださることがおできになるのよ。』そこで私は思いました。『他のことは全部試してみただし、イエス様にもチャンスあげてもいいかもしれない。』スターラは単純なお祈りをしてみました。「神様、もしもあなたが存在しているのなら、三日間あげます。ここに私の人生があります。あなたにできることをやってみてください。」

それからちょうど三日後、スターラは偶然ネルソン夫人に出会いました。スターラは自分の祈りの話をし、二人は近くの静かな場所を見つけて、長い間話し込みました。それから二人は一緒に祈り、スターラは神に、自分の過去を赦し、もう一度人生を始められるよう助けてくださいと祈ったのです。

スターラは自分だけのアパートにと引っ越しました。そして聖書を読んで何時間も独りで過ごし、地元の教会にも行き始めました。教会でスターラは多くの愛と受容を感じることができました。そしてそれは、彼女が自分の過去を、教会の何人かのクリスチャンたちに打ち明けてからも変わることはありませんでした。「クリスチャンになった最初の一年間はまるで新婚旅行の期間のようでした。性的な誘惑は大きい問題ではありませんでした。私に受けとめられる限りの愛を尽くして愛してくださるお方を、やっと見出したのだと感じたのです。」

何年間にもわたって、スターラのいやしは多くの面において訪れました。「私が経験した最も

深く大きな変化は、男性に対する憎しみから解放されたことです。」と彼女は言っています。「まず最初に私は、神様が私に、自分を強姦した男性を含むすべての男性を赦そうという、自発的な意志だけでも持つことを望んでおられるのだと分かるところまで到達しました。感情的にはまだ赦すことができないということを神様はご存知でした。でも神様はただ、私が赦したいという意志を持つことを望んでおられたのです。私にできた精一杯のことはただ『分かりました、神様。やってみます』と祈ることだけでした。男性に対するこういった憎しみの思いは非常に大きな拠点となっていました。けれども時間と祈りをかけて、時には断食すらして、私は自分の態度が変わってきていることを感じるようになりました。やがて私は、自分を強姦した男性のために実際に祈り、そしてそれを心から祈れるところまで到達したのです。」

今日スターラは博士課程を修め、セラピストとして、男性、女性を問わず、心に深い傷を負った人が、いやしと解決を見出せるよう手助けをしています。また、自分自身の経験から、特にレズビアンから脱出しようと葛藤している女性たちに対し、スターラは励ましを与えるにふさわしい者となっているのです。

「他の敬虔なクリスチャンの男性や女性たちとの、近くて思いやりのある関係が、本当に大切なものとなっております」と彼女は言っています。「周りの人たちに自由に話をし、自分の感情を分かち合うことができるということは、私を何年間も窒息させてきた罪悪感と責めという重い雲が取り去られることに大いに役立ってきました。強姦した男性に対して、私はそれを

そそのかすようなことを何一つしなかったのだと気づいた今は、自分のうちにある女性の部分を隠す必要はありません。私は自分の女性らしさを表わすような服装や、感じ方、考え方、反応をすることが、もう自由にできるのです。自分の内側で本当に長い間押さえつけられていた女性としての自分を、私は今発見しつつあるのです(2)。」同性愛に悩む人にも、キリストにあるいやしと新しい自由という希望はあるのです！

本書の著者ボブ・デイビーズとローリー・レンツェルは、一九七九年に、当時カリフォルニア州サンラファエルにあった「ラブ・イン・アクション」のスタッフに加わって以来、同性愛からの脱出を助ける働きに携わってきました。私たちは二人とも、同性愛からの脱出を専門に、照会や助けを世界規模で提供しているネットワーク「エクソダス・インターナショナル」のリーダーでもあります〔訳者注：エクソダスとは脱出の意味、聖書の出エジプト記も同名〕。一九八五年以降ボブは「エクソダス」の幹部役員としても奉仕しています。二人の働きにはこのような共通点があるにもかかわらず、この分野の奉仕に携わることとなったきっかけは、お互いまったく違った理由からでした。

ローリーの話

一九七七年十月のある晩、私（ローリー）はミネアポリスにある、クリスチャン系の二十四時間いのちの電話の電話相談員として、自分の受け持ち時間に入ろうとしていました。数台の

電話の前に座り、電話が鳴るのを待っていた時、一人の友人が「ラブ・イン・アクション」のニュースレターを私の手の中に置いて言いました。「ローリー、これ読んでみて。」

そこには「ラブ・イン・アクション」が事務員のスタッフを募集していて、カウンセリングの資料をまとめるために、記事を書く技術と事務系の仕事経験を持つ、同性愛に関心のある人を求めているとありました。

「これって、まるで私のことみたい」と私は言い、友人もそれにうなずきました。私はいのちの電話の相談員を務めていただけでなく、大学ではジャーナリズムを専攻し、新聞記者としても数年間のキャリアを持つていました。そして当時は受付の仕事もしていたのです。さらにもっと重要なことに、私はそのほんの少し前に、同性愛について非常に多くのこと、私の予想もしなかったほど多くのことを知るようになっていました。親しい友人が同性愛を克服するのにクリスチャンの助けを求めているのをきっかけに、私はそのような助けを得ることが案外難しいことを知りました。麻薬やお酒から、あるいは売春からさえ、脱出しようとする人々のためには、クリスチャン系のカウンセリングやサポートがたくさんありました。けれども同性愛と縁を切ろうとする男性や女性たちのためには、そのようなカウンセリングは皆無に等しかったのです。

また一九七七年当時は、キリスト教の見解から書かれた同性愛の書物は本当に乏しく、良くバランスの取れた書き物は二、三点ならありましたが、それ以外のほとんどは書き方がお粗末で、

がっかりさせられるようなものや、扇情的なものばかりでした（例えば「私は同性愛の十もの悪霊から解放され、今は完全に自由です！」といったようなものです）。

「ラブ・イン・アクション」のニュースレターを読んだ後、私はこのようなお粗末な状況を変えることに個人的に関わる機会を思つてわくわくしました。手紙を何度かやりとりし、また実際に訪問した結果、私が「ラブ・イン・アクション」に向いているということ、私自身を含む関係者全員が認めることとなりました。そこで一九七九年一月、私はノースウエスト・オリエント航空のジェット機に乗り込み、氷に閉ざされたミネアポリスを後にして、青々と茂った緑の丘の続くカリフォルニア州サンラファエルにと向かったのです。

私は、聖書が、同性愛から脱出しようとする人々にいやしと変化を約束していると、心の底から信じていました。「ラブ・イン・アクション」に到着した際の私の目標は、この希望を文書を通じて伝えていくことでした。けれども何事でも価値あることは、そうやすやすと訪れるものではありません。性的なアイデンティティーという、それほどまでに深い事柄を変えようとする男性や女性たちへの働きに携わることには、代償が必要です。まもなく私は、そのような人たちと一線を画した単なる役立つ傍観者ではなくなっていました。私を他の人々への奉仕にふさわしい者として備える行程の中で、神は、言うに言われぬ内側の罪や葛藤、誤った概念や不安定な領域に、私自身が直面するようにされたのです。

それからの数年間、私は「ラブ・イン・アクション」の共同住宅に住み込み、ゲイやレズビ

アンの生活から抜け出そうとする男性、女性、両方の人たちと毎日の生活をともしました。私たちは数え切れない時間を費やして、話したり、祈ったり、泣いたり、打ち明け合ったりしました。そしてそれ以外にも、ただ一緒におしゃべりしたり、楽しい時を過ごしたりもしました。現在の私に最も近くて深い人間関係のいくつかは、そのような年月の中で育まれたものです。

レズビアンからのいやしを求める女性たちと一緒に住まいや友情関係を共有していく中で、私は自分自身について多くのことを知ることとなりました。私自身の性的アイデンティティーの不安定な部分がすぐに表面に出てきました。私はレズビアンの関係になったことは一度もありませんが、それでも数ヶ月の間、同性の女性たちに対して性的および感情的に強く惹かれる時期があったのです。私は自分の内に潜んでいた、さまざまな心の傷や態度をよく吟味し、周囲にいた信頼のおけるクリスチャンの男性や女性たちからのカウンセリングと祈りのサポートを受けなければなりませんでした。

そのような誘惑の時期はやがて過ぎ去りましたが、けれどもそれ以来、私は決して自分の性的アイデンティティーを、まったく見直す必要のないものとみなすことはなくなりました。また、それ以降、私は毎年、自分が女性であるということはどういうことなのかを自問し、吟味し、祈り、また自分の性的アイデンティティーの中でいやしや再定義を必要とする新しい分野を発見してきました。三人の幼い娘を持つ母親として、私は女性としての自分に神が持つておられる意図を最大限に発見し、把握しようという気持ちをもますます強めているのです。

ボブと私は男性および女性の同性愛に関する多くの書物を読み、調査を行ない、そしてそれをこの世代的観点およびキリスト教的観点の両方から見解から吟味してきました。私たちは二人とも自分たちの人生や性的領域の中で、多くのいやしを経験してきました。けれども、本書の中で私たちが皆さんにお分かちできる最も良い点はおそらく、私たちが何年間にもわたって、大勢の男性や女性たちと、苦楽をともにしながら、彼ら「戦友」が、性的アイデンティティーのいやしという、非常にすらくも驚くべき過程をくぐり抜けるのを見てきたという経験ではないかと思っています。私たちは、さまざまな決心についてとことん議論したり、難しい質問に取り組んだりして、人々の顔に希望が表われるのを目にしました。私たち自身も彼らのかたわらで、ともに葛藤し、いやしという長旅のお供をしてきたのです。

このようないやしの過程がどれほどつらいものであるか、私たちはよく承知しています。再び同性愛に戻ることを選んだ友人たちやカウンセリング相手たちをよく知っている私たちには、彼らを厳しく裁いてしまうことなど、とてもできません。けれども同時に私たちは、これまで本当に長きにわたって、本当に大勢の男性や女性たちの内に、堅固で本質のないやしが起こるのも、この目で見てきたのです。それゆえ私たちは今何のためらいもなく、こう言い切ることができるのです。「同性愛から脱出する道は確かにあります。まごころからそう願う人には、男性であっても女性であっても、キリストにおける望みといやしがあるのです」と。

ボブの話

セックスについての十代向けの本を読んだ十四才の時のあの日のことを、私（ボブ）は決して忘れないでしょう。その本の終わりのほうには、同性愛の症状について述べてある章がありました。恐ろしいことに、私はそのすべての項目が何と自分に当てはまるということを発見したのです！

私は教会で育ったようなものでした。お祈りや毎日の聖書朗読、日曜学校に欠かさず出席するなどといったことは、習慣となつて身につけていました。「それなのに、どうして僕はこんな問題を抱えてしまったんだろうか」と私は考え込みました。

私は助けを求めようとする代わりに、自分の恐れを内に隠し、皆から距離を置くようになり、やがて教会には行かなくなつてしまいました。私の抱える最も深い必要性になんか、神はとんと無頓着であられると思えるのに、なぜわざわざ教会に行く必要があるのでしょうか。

十代の終わり頃、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学の一年生の時に、私は大学の図書館から同性愛に関する本を何冊か借り、北アメリカの多くの都市に大きなゲイのサブカルチャー「〔訳者注：伝統的文化に対する裏通りの文化〕があることを知りました。好奇心を覚えた私は、アダルト書店に行き始め、同性愛の雑誌を読むようになりました。他の男性と実際の性的関係を求めなかったのは、単に罪悪感と恐れからだけでした。

けれども数年後、私は子ども時代の信仰に立ち返る決心をし、アルバータ州スリーヒルズに

あるブレイリー聖書学校に入学が認められました。それからの三年間は、教室の中でも、個人的な学びにおいても、聖書を絶えず吸収し、霊的に強められていきました。また、以前にはまったく未知のものであった、周りの男女だちとの近い友情関係を味わうにつれ、私の内に自信といったものも芽生えていきました。けれども、それでも私は、自分の抱える同性愛の欲望を、深く閉ざされた秘密として保ち続けたのです。

卒業後二年して、私は世界規模の宣教団体ユース・ウィズ・ア・ミッションがドイツで行っていた使徒訓練学校に行き始めました。六ヶ月間のプログラムが終了すると、私は自分の将来について祈り始めました。神はどのように私がお仕えしていくことを望まれているだろうか、と。ある朝祈っていると、母国に戻って、バンクーバー最大のゲイバーの前でトラクトを配っている自分の姿が頭に浮かんできて、私はがっくりしてしまいました。「とんでもない。何でもするけど、そんなことだけは嫌だ！」こう私は心の中でうめいたのです。

それから数年間は、しつこく続いていた同性愛の葛藤を忘れようと努め、宣教師になるための訓練を受け始めました。私はまだ性的関係を持つたことはありませんでしたが、同性愛に惹かれる力はますます強くなっていました。そんなある日のこと、目にした本の中に「ラブ・イン・アクション（LIA）」の団体のことが載っていました。私はニュースレターの毎月講読を申し込みました。そしてとうとう一九七八年、自分の同性愛の葛藤は、何らかの専門的な助けなしには決して解決できないだろうと、私は覚悟を決めるにいたりました。それでLIAに手紙を

書き、その泊まりがけプログラムに申し込んだのです。一九七九年六月一日、私はL I Aの玄関に立っていました。

その夏、私はいくつかの驚くべきことを発見しました。私には自分自身が性的な葛藤を覚えた経験があったので、同じような戦いに直面している他の人たちに、意義あるサポートを与えるということに気づいたのです。また実際の同性愛の関係にまでいたった経験がなかったおかげで、他の人たちにも、がんばり抜くことや、霊的な戦いに関しての貴重な洞察を提供することができたのです。

私が当初予定していた夏だけの参加は、半年に延び、さらに一年にと延びていきました。まもなく私は、自分の人生が大きな決定的な曲がり角を曲がったことに気がつきました。私はL I Aが毎月発行していたニュースレターを編集したり、新しい文書を書いたり、さまざまな地域のセミナーで話をしたりするようになっていったのです。

私自身の人生の中にも神は働きかけ続けてくださいました。私にとって大きな驚きだったのは、自分の問題が同性愛だけではなかったのだということに気づいたことです。同性愛の不道德な欲望は、もっと深いところにある、いやしが必要な精神的な傷が表面化した症状にすぎなかったのです。L I Aのサポートグループに助けられ、私はそのような葛藤を、自分の内の不安や恐れ、他の男性たちに対するうらやみの気持ちとして、オープンに告白することができるようになっていきました。

また、教会の与えてくれた無条件の愛、特に「ストレート」な男性たちからのサポートも、私の成長に大きな役割を果たしました。L I Aのスタッフという私の地位から、皆が私の過去を知っていました。けれども私の教会の男性たちは、笑顔や暖かい抱擁を通して、私は受け入れられている存在なんだということを、恐れず示してくれたのです。

私はずっと同性の男性たちの中で、劣等感に苦しんできました。けれども、このようなクリスチャンの男性たちから受け入れられることを通して、私は次第に「普通の男同士の仲間」の一員として自分をみなすことができるようになっていきました。このように同性に仲間として受け入れられているのだという感覚は、聖書学校時代にもあったものですが、そのいやしさがさらに続いていたのです。

それから人生最大の驚くべき出来事が起こりました。一九八四年、私は神が自分を結婚の關係へと導いておられることを感じたのです。私は牧師や親友たちからの確認やカウンセリングを求めました。九ヶ月後、私は、茶色の目にこげ茶色の髪をした美しい女性と結婚の誓いの言葉を述べていたのです。新しい冒険が始まるうとしていました！

けれども私のいやしのプロセスは、結婚してからも続いていました。結婚した男性として、私は妻バムに対する夫と恋人、そして友人としての役割の中で成長していきました。同性愛を扱ったことのある多くの男性と同様、私も時々自分の「受け身的な態度」で葛藤を覚えることがあります。私は今でも人と衝突することが嫌いです。ですから神は、私とその面において成

長でできるよう、たっぷりと機会を与えてくださっています。（例えばそれは、上の階に住む大柄で筋骨たくましい男性のところに行って、夜中の十一時にがなり立てるテレビの音をもっと小さくするよう頼みに行くことであつたり、あるいは、休暇の過ごし方に対する妻のアイデアを、私が本音のところかどうか思っているかを妻に白状したりするようなことです！）

私の同性愛の問題の深い「根」に直面することであれ、またそれ以外に私の霊的な歩みがチャレンジに直面することであれ、私は自分の成長が、生涯をかけて継続していくものであるということを知っています。そして成長していくということは、すべてのクリスチャンが直面する同じチャレンジであり、皆が同じ可能性を持っているのです。私たちのうち、誰もすでに「到達した」者はいません。私たちは皆とともにこの歩みを続けているのです！

私たちが学んだこと

過去十四年間にわたって、私たちはゲイやレズビアン生活を後にした何百人もの男性や女性たちと個人的に関わってきました。そのような彼らの経験を、以下の章でさらに多く紹介したいと思います。

こういった働きに実際に関わってきた私たち二人の経験を合わせてみて実感していることは、同性愛を克服しようとする人たちは、それぞれ一人ずつ異なっているということです。同性愛から脱出した人たちの年齢層、性格、職業、教会宗派は本当にさまざまです。

元ゲイや、元レズビアンだった人たちの中には、サンフランシスコやニューヨークのような都会で、数十年、同性愛のサブカルチャーに浸っていた人たちもいれば、誰にも打ち明けずに沈黙の葛藤を続け、同性愛の関係を一度も持たずとも、同性愛の空想や欲望と戦ってきた人たちもいます。

現在そのような男性や女性たちの中には、同性愛の関係を持たなくなつて十年、二十年という人たちがいます。彼らは、自分たちの内側の強い同性愛の渴望をただ抑えつけてきているだけというわけではありません。彼らの人生の中で、この同性愛という問題が真に解消したのです。

いやしには二つとして同じものはありません。手っ取り早い治療法や、ワンツースリーの公式といったものも存在していません。同性愛を克服した人たちの中には、教会からの助けだけで十分立ち直れた人も何人かいます。また多くのケースでは、「ラブ・イン・アクション」のような、カウンセリングや毎週の交わりの集いなどを提供している、脱同性愛の団体から助けをもらつて立ち直つています。さらに別のケース、特に医師による専門知識を必要とするような、深い根を持つ症状が表われているような場合は、前記の助けに加えて、個人的に心理学によるセラピーも同時に受けることで立ち直れたという人たちもいます。

この本で皆さんの疑問がすべて解けるわけではないかもしれませんが、皆さん自身が同性愛を克服しようとする際に直面することになる、最も大切な事柄の導入としてでも、この本が役立つことを私たちは願っています。神がさまざまな男性や女性たちの人生にどのよう

に働きかけてくださったのかを読むならば、きつと皆さん自身の回復のプロセスに対しても、洞察と励ましを受けられることでしょう。